



活動日誌

2002年(平成14年)

4月1日 竹廣文明助教授の後任として、堀之内正博助教授着任。森山和子事務補佐員の後任として、福原千晴事務補佐員着任。

4月5日 運営委員会

4月22日 管理委員会

4月30日 運営委員会

5月10日 第46回『汽水域懇談会』

埼玉大学理工学研究科の浅枝隆教授が「モデル解析による抽水植物群落における栄養塩循環の定量評価」と題して話題提供。

5月 中海分室の改装工事完了

5月15日 拡大管理委員会

6月1日 総合理工学部から瀬戸浩二助教授異動着任。

6月20日 特別講演会「未踏の地球深部への挑戦ー統合国際深海掘削計画ー」

海洋科学技術センター深海地球ドリリング計画(OD21)推進本部長平朝彦氏講演。

7月 建物改修工事のため、総合理工学部1号館全学共有スペースに仮移転(2003年2月まで)。

7月22日 運営委員会

8月1日 拡大(教員資格審査)管理委員会・管理委員会

8月9日 管理委員会

9月4日 拡大(教員資格審査)管理委員会・管理委員会

10月5日 しまね県民大学(専門講座・環境)を神

西湖において開催。参加者39名。

10月16日 5人目の専任スタッフとして倉田健悟助教授着任。

10月28日 拡大管理委員会・管理委員会

11月2・3日 応用生態工学会主催の現地見学会とフォーラム、「自然再生事業と市民活動ー霞ヶ浦・琵琶湖・宍道湖・中海ー」を共催。



11月3日のフォーラム(松江テルサ)

11月 研究機関研究員(非常勤講師)として高田裕之氏と宮本康氏着任。

11月15日 「大学等地域開放特別事業」

八束町教育委員会及び国土交通省境港湾事務所の協力を得て、八束中学校の生徒を対象に中海の湖上観察会開催。

11月22日 第47回『汽水域懇談会』

堀之内・倉田両助教授が、それぞれ「アマモ場の魚類群集構造の形成機構」および「汽水域の沿岸部を利用する人間と生息場所とする生物の共存」と題して話題提供。

2003年(平成15年)

1月6日 運営委員会

1月11日 第10回新春恒例「汽水域研究発表会」を島根県会館で開催(県内外から75名が参加)。

1月20日 拡大管理委員会

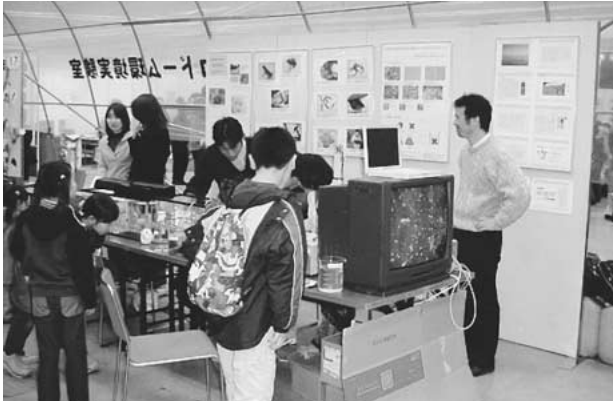
2月2日 「おもしろ環境フェスティバル」(財島根ふれあい環境財団21, 松江市環境フェスティバル実行委員会, 島根大学社会連携推進本部主催)に参加(於松江くにびきメッセ)。

2月3日 センターの客員Ⅲ種研究員(教授)として、インドのカカニ・ナゲスワラ・ラオ氏着任。

2月 建物の改修が1月末に完成し、2月中旬引っ



しまね県民大学での湖上観察(神西湖)



おもしろ環境フェスティバル(くにびきメッセ)

越し完了。

2月27日汽水域研究センター研究推進協議会開催。

2月28日 新センターお披露目会。

3月4日 「しまね産学官研究交流会」(主催、島根大学ほか)にてポスター展示および施設案内(堀之内・倉田)。会場；島根大学学生会館

3月8日 学長裁量経費による「ウェルカム島大」企画の一環として、白鳥号による早春宍道湖クルージング開催。

3月31日 吉田洋子さん退職。

平成14年度科学研究費補助金

基盤研究(A)(2)「中海干拓中止後の汽水環境の修復および保全に関する研究」(継続, 研究代表者；高安克巳 研究分担者；國井秀伸, 瀬戸浩二)

基盤研究(B)(2)「汽水域における水生絶滅危惧植物の保全と修復」(継続, 研究代表者；國井秀伸

研究分担者；高安克巳)

若手研究(B)「南極湖沼に記録された完新世の古気候変遷史」(新規, 研究代表者；瀬戸浩二)

基盤研究(A)(1)「長良川河口堰が汽水域生息場の特性に与えた影響に関する研究」(継続, 研究分担者；國井秀伸 研究代表者；金沢大学工学部玉井信行)

公共団体、民間企業等との 共同研究、受託研究など

(受託研究)

「中海・宍道湖における水生植物の保全と修復に関する調査研究」(國井秀伸, 委託者；国土交通省出雲工事事務所)

「宍道湖・中海周辺の水域における絶滅危惧植物の実態調査」(國井秀伸, 委託者；ホシザキグリーン財団)

(共同研究)

「中海宍道湖における汽水環境と貧酸素化の研究」(高安克巳+(有)徳岡汽水環境研究所)

(奨学寄附金)

「沿岸域環境の衛星リモートセンシングの応用」(高安克巳, 寄附者；(財)島根県環境保健公社)

「北浦・古浦における魚類相の調査」(堀之内正博, 寄附者；(財)島根県環境保健公社)

(その他研究助成金)

「沿岸生態系におけるヨシ帯の役割—ヨシ帯の衰退・消滅は魚類群集にどのような影響を及ぼすか—」(堀之内正博, 住友財団研究助成)

編集後記

3月発行の予定がだいぶ遅くなってしまいました。初校は3月12日に終え、英文校正を除いて年度内には印刷へ回せる状態だったのですが、ラグナ用の予算をセンターの引越しの費用に使ってしまったため、年度を越えての発行となりました。早くに原稿を提出していただいた著者の皆様に、この場を借りてお詫びいたします。ラグナの発行形態に関しては以前から論議しているところですが、今号までは従来そのままの形態での発行となりました。センターの専任スタッフ5名が昨年秋によく揃いましたので、次号以降の発行形態についてもそろそろ結論を出そうと思っております。ご意見等、引き続きお待ちしております。